

中野区ゆかりのダダイズム

高橋新吉とその表現



高橋新吉とは

愛媛県出身の作家であり、詩人。当初は短編小説を書いていたが、福士幸次郎の詩集『展望』がおもしろかったために自身も詩を書くようになった。19歳でダダイズムと出会い、日本に広げた人の一人として知られる。辻潤によって代表作となる『ダダイスト新吉の詩』が出版された。しかしダダイズムに対する熱が失われていくと元より興味を持っていた仏教・禅の思想を色濃くしていった。

彼をひも解くキーワードである「ダダイズム」、「仏教・禅」を中心に伝えたい。

高橋新吉とダダイズム

「第一次大戦中から戦後にかけて、チューリヒからベルリン・ケルン・パリと波及した芸術運動。既成の権威・道徳・習俗・芸術形式の一切を否定し、自発性と偶発性を尊重。意味のない音声詩・コラーージュ・オブジェ・フォトモンタージュ・パフォーマンスなどを生み、20世紀芸術の源流となる。東京・ニューヨークにも伝播。略称、ダダ。」

（新村出編 広辞苑第6版）

2016年にダダイズムは誕生100年を迎え、各地で展示会等が開催さ

れた。

高橋新吉がダダイズムと出会ったのは、1920（大正9）年、彼が短編小説を投稿していた『万朝報』に掲載された「亭楽主義の最新芸術」という記事においてであった。「同じ頁の中に縦に組まれたり横に組まれて居たり甚だしきに至っては斜に組まれたりして居て、」という一文に彼は感激した。また、「余は腐爛せる太陽の膿漏の中に蠢動する宇宙的能力の総てに対して反対を宣言する」というダダイズムの創始者トリスタン・ツアラの言葉も引用されており、そこに彼が学んでいた「禅的な響きを感じた」という。その3年後彼が辻潤にダダイズムについて話し、原稿を読んでもらう中で、辻潤の編纂で『ダダイスト新吉の詩』が発刊された。これは日本におけるダダイズムの代表作品ともいえる。

「断言はダダイスト」と題し、「DADAは一切を断言し否定する」で始まる文はダダイズムを説明する文のようでもあり、それ自体がダダイズムを感じる詩となっている。「皿」では、皿皿皿皿…と何度も繰り返し使うことで、ひたすら皿洗いをしている状況と、その倦怠感を表すと同時に、視覚的に表すことによって詩は言葉によって作られるものという概念を壊した。

しかしその3年後の1926（大正15）年に発刊された詩集『祇園祭り』ではダダイズムとの決別とも取れる詩を書いており、ダダイズム自体が短命な運動であったのと同じように新吉の中のダダイズムの表現は終わった。それでも新吉が広めたダダイズムはその後中原中也や宮澤賢治に影響を与えており、彼らの作品からもその思想を感じ取ることができる。

『ダダイスト新吉の詩』
高橋新吉／著
日本図書センター 2003
所蔵：中央（禁帯出）



高橋新吉と仏教・禅

彼が11歳の時に亡くした母が信心深い人であった。その血を継いだのか、新吉は20歳の頃、故郷・愛媛県の金山出石寺で小僧となった。この頃彼は将来への不安や孤独を抱いており「坊主になることを少しも嫌だと思わなかった」と残している。寺では雑用に忙しくしながらも經典を面白く思っていた。寺の繁忙期が終わるとここでも居心地が悪くなり、滞在数カ月で上京することとなる。



『参禅記』の中に「激烈な闘争に明け暮れる都会生活の、塵埃に塗れ枯渇した枯木の如き身心」とある。彼は上京してダダイズムに傾倒した後、草野心平や中原中也と交流しながらも、お酒におぼれて喧嘩をするような日々を過ごしていた。26歳の時、故郷の寺で聞いた禅の教えに「験の皮が脱れるような思いをし

た」と話している。精神的な病と静養の日々を繰り返しながら、大阪中之島の図書館に通い大般若経600巻を読んだり、お寺に参禅して、「心に深い喜び」を感じることがあったという。仏教雑誌『大法輪』などの宗教や経文についての寄稿はライフワークの一つとなり、全4巻から成る『高橋新吉全集』の3巻は「禅」というタイトルでまとめられている。

高橋新吉研究

新吉と親交の深かった中原中也が「高橋新吉論」を書いている。これは、論説自体は途中で終わっているが、中原中也が新吉と対面する前に手紙として文を添えて送ったものである。「高橋新吉は私によれば良心による形而上学者だ。」と話し、無辜な心を持ち、細心であり、論理を愛しているとしている。この手紙の後に中原中也が新吉を訪ねたところから交流が始まるのだが、新吉自身も「中原中也の生涯」の中で、この手紙について、「達筆で、論旨も明快で、悔り難い気がした」と言っている。

また、『日本のアヴァンギャルド』の中で和田敦彦は「高橋新吉の詩小説は、狂気を表現すると言うよりも狂気に「なる」ことを実践した表現であり、その意味では当時の狂気の言語と区別できない要素さえも備えている。」と話している。ここでいう「当時」とは女性の社会進出を狂気としていた「当時」である。療養時に新吉が書いた文章は時系列も主述の関係もバラバラであるが、ダダイズムの破壊性を備えた新吉だからこそできる先進的な表現方法であるとも言える。同様の点について『昭和詩人論』の中で平居謙は「『分裂した自己の表出』について考察する。そして実はこの点こそ高橋新吉の独自性を認め得る。」としている。

高橋新吉は1945(昭和20)年中野で過ごした。5月25日の空襲で沼袋の家が焼失し、鞆に本が数冊入っただけの荷物で江古田に引っ越した。子どもの頃から読書家で、生き方を模索し続けた新吉の作品からは中野で経験した空襲や終戦のことも感じ取ることができるかもしれない。

ダダイズムの退却とシュルレアリスムの発展

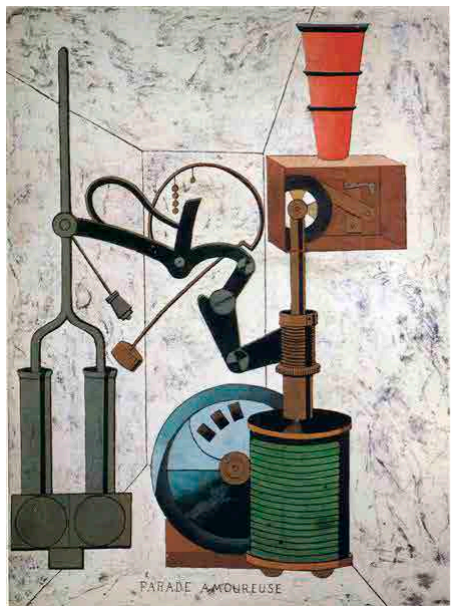
ダダイズムの多くはその後20世紀最大の芸術運動であるシュルレアリスムの潮流に巻き込まれていった。この流れが決定的になったのにはある興味深い出来事があった。シュルレアリスムの提言者であるアンドレ・ブルトンはあるダダイストとして有名だった。そのブルトンがダダの中心人物であったトリスタン・ツァラと盛大なケンカをしたのだ。1923年、ブルトンはダダの舞台で友人のピカソのことを悪く言う演出に激怒し、仲間と暴動を起こした。ツァラは警察を呼んで対応したが、それによって全てに反発するダダが国家権力を頼るなんて、と反感を買った翌1924年、ブルトンの『シュルレアリスム宣言』によって、爆発的に潮流は大きくなり、「シュール」という略称で人々に根付いていった。ちなみに、災難だったツァラも後にアルトンと和解し、シュルレアリスムの活動家となっている。それだけシュルレアリスムの芸術性や影響力は強かったのだ。

高橋新吉の一生

- 一九〇一 〇歳 愛媛県西宇和郡に生まれる
- 一九二二 11歳 母死去
- 一九二〇 19歳 新聞に短編小説初入選、ダダイズムと出会う
- 一九二二 20歳 七か月間、寺の小僧となり仏教を知る
- 一九二二 21歳 詩や小説が雑誌に掲載される
- 一九二六 25歳 ダダとの決別
- 一九二七 26歳 坐禅を教わり、仏教に目覚める
- 一九四三 42歳 中野区沼袋へ転居
- 一九四五 44歳 中野区江古田へ転居
- 一九五一 50歳 結婚
- 一九五六 55歳 雑誌「新体詩」に英訳詩が二篇収録
- 一九六三 62歳 英文雑誌「オリエント・ウエスト」に禅ポエムとして詩が三篇収録
- 一九七三 72歳 芸術選奨文部大臣賞を受賞
- 一九八二 81歳 高橋新吉全集全四巻発行
- 一九八七 86歳 死去



『自動筆記』ジャン・アルプ 1916年
理性によるコントロールを取り除いて意識下のイメージを記述することを目指した手法。主に詩や文章の制作に取り入れられていたが、ジャン・アルプは絵画にも取り入れた。



『アモーレ・パレード』
フランシス・ピカビア 1917年
ダダイズムの創始者の一人であるフランシス・ピカビアは機械の部品で多くの作品を作った。機械をその用途でない無価値なものとすることでその芸術性を示したと考えられている。

～参考文献～
『高橋新吉全集 全4巻』高橋新吉／著 青土社 1982 所蔵：中央（保存庫）
『新編中原中也全集 第4巻（本文篇）』中原中也／著 角川書店 2003 所蔵：中央
『日本のアバンギャルド』和田博文／編 世界思想社 2005 所蔵：中央
『昭和詩人論』日本現代詩研究者国際ネットワーク／編 有精堂出版 1994 所蔵：中央